

チベット人の歴史的移動・定着に関する若干の考察 —ソル〜クンプとブータンの観察から—

月原 敏博

京都大学大学院文学研究科

1991年夏の調査においては、医学班とともにクムジュンに短期滞在し、クンプ地方内の調査域を広げたが、その前に、筆者のみはソル地方を訪れていた。ズンベシを基点として約2週間滞在し、おもに、夏放牧地での放牧生活や夏祭り（ヤルチャン）を観察した。ズンベシでの調査は着手したばかりでその成果のとりまとめには継続調査が要るが、本稿では、ティンリー地方に続き、ソル地方を訪れることによって得られたヒマラヤ南面の「チベット人」の生業、生活空間についての展望と、クンプの巨視的な歴史的な位置づけとを、覚え書きとして記しておく。

1 ジリとルクラの間

早朝カトマンズを発つバスに乗り、12時間ちかくたった夕暮れ時、終点のジリ（Jiri）に着く。ジリは標高1850m、道路交通と徒歩交通の接続点にできた新しい街である。エベレスト・トレッキングルートの開始点でもある。

飛行機やヘリを使わないなら、クンプへ行くにもジリから歩かなければならない。クンプ地方のナムチェまでは、一般ののんびりしたトレッキング・スケジュールだと1週間から10日の行程、かなり健脚のトレッカーでも5日、足が早い地元シェルパでも4日くらいはかかる。とくに、定期便のあるルクラまでは起伏が大きく、日本でいえば、まるで南アルプスの幾つもの山列を横断していくような、ハードな道である。毎日が、1500m登り1500m下るといふほどの、山また山、谷また谷の横断道なのだ（図1）。

ジリの近くにもシェルパは住んでいる。しかし、他の民族も多く、日常会話はシェルパでもネパール語をつかっていることが多い。これは、カリコーラあたりまでのソル一般、つまり、シェルパ族居住地の低標高地域一般で、かなりいえることである。

ジリから小さな峠を越えて下り、キムティ・コ

ーラ（Khimti Khola）沿いのシバラヤ（Shivalaya、1800m）からまた登り、2700mの峠を越えてバンドル（Bhandar、2200m）へ下り、そこからさらにリク・コーラ（Likhu Khola）に下って、ケンジャ（Kenja、1650m）からまた登る。ここやセテ（Sete、2575m）あたりになると、通り過ぎる村々の住民は、ようやくシェルパが支配的になる。ナムチェまでのトレッキングルートでもっとも標高の高いラムジュラ（Lamjura、3530m）峠では、はじめて牝牛の群れの夏放牧が見られ、タクトブツ（Tragdobuk、2860m）を経てズンベシ（Junbesi、2675m）へと下りる。

ズンベシ周辺は、ソル地方の中心地の一つである、ソルとはそもそもこのズンベシ周辺の地域を指すショルンないしショロン、あるいはショレという言葉からきているのだ。

ズンベシの先のリンモ（Ringmo、2800m）の谷は、北のヌムブル（Numbur、6959m）やキヤリヨルン（Karyolung、6511m）の氷河を源としている。これらの山々は、クンプ地方のターメの谷（Bote Kosi）の南を画す山塊に連なっており、いわば、ヒマラヤ主脈の前山をなしている。ズンベシの谷も、その前衛の一角から流れ落ちている。

リンモから登って有名な寺院のあるタキシンド

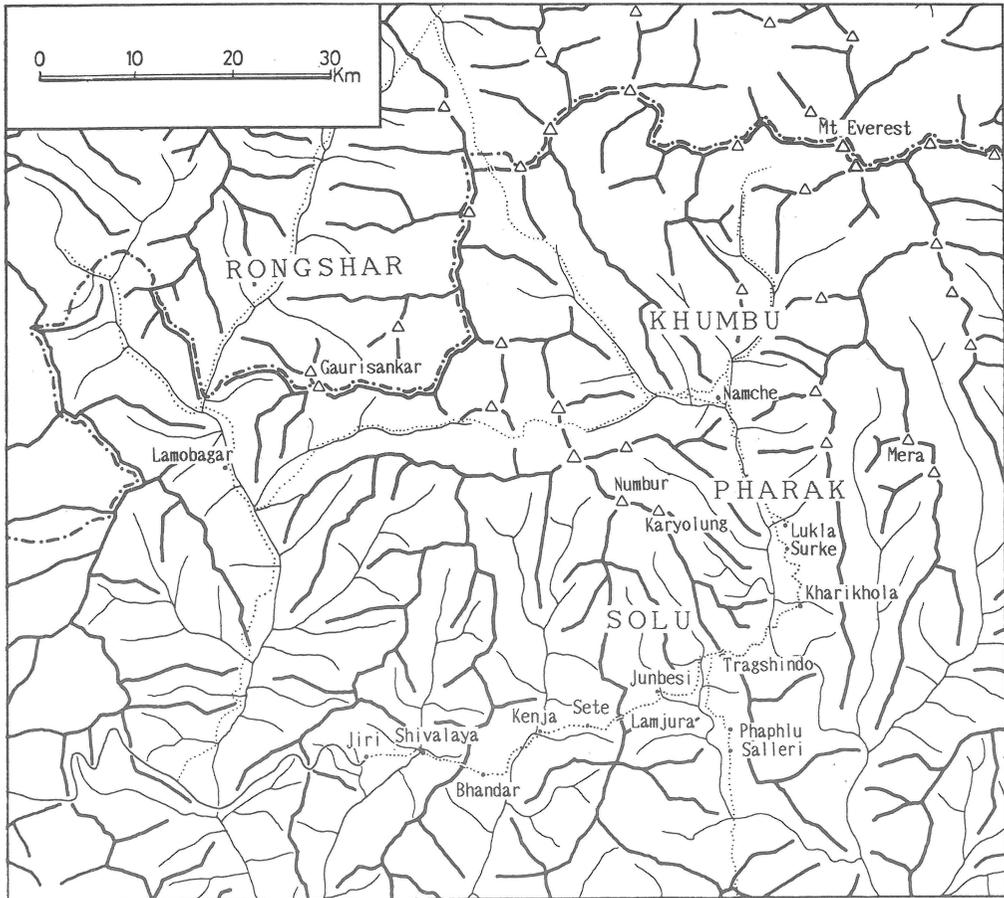
(Tragsindo) の峠 (3071m) を越えると、ようやくクンプから落ちるドゥド・コシ (Dudh Kosi) 水系にはいる。長々と森の中の道を下ってヌンタラ (Nuntala, 2250m) を過ぎ、稲やシコクビエの育つ水田を見ながらドゥド・コシの本流 (1563 m) を渡るあたりは、暑くてヒルが少なくない。再び長い登りを登りきって、ようやく支流に開けたカリコーラ (Kharikhola, 2080m) に着く。ここも、ナムチェのような週一回のバザールが開かれる場所である。カリコーラから先は、トラバース気味に支流へ振ることを繰り返す道をたどって、最後はスルケ (Surke, 2293m) からルクラ (Lukla, 2850m) へと一気に上がる。

2 ソル〜クンプとブータンの景観

ソルを訪れたことによって、クンプへと続くシェルパ族居住地の低標高地域を実際に見ることができたわけだが、そこでたいへんびっくりしたことは、ソル〜クンプの全体景観が、ブータンと非常に似ている、ということであった。

とくに似ていると感じた巨視的景観とは、集落と農耕・牧畜利用地、そしてそれらと森の位置関係に関してであって、ここでいうブータンとは、クンプに対しては、別稿で名付けた「ヤクのゾーン」、ソルに対しては、「中央の谷々」の周辺が対応している。ただし、ブータンの「中央の谷々」には、稲のできるところがあるのにくらべ、シェルパ族を支配的な住民とするソルの大部分の集落

図1 ソル地方の位置



では、稲はできない。ソルにもっともよく似ているのは、プータンでも、筆者が「中間のゾーン」と呼んだ、畑作と移牧を兼業する地帯（集落の位置が標高2500から2800m程度）である。地形の上では、「中央の谷々」のうち比較的標高の高いものや「北部山地」の南面に見られる村々であり、プータンの具体例でいえば、ハ (Ha)、プムタン (Bumthang)、セフ (Sephu)、ガサ (Gasa) などがこれにあたる。

1) 森の存在

ソルには森が多い。針葉樹の森である。ところによっては、元の植生は大いに改変されており、森が草原に変わっている。そこでは、あらたしい草をはやすために冬には火が入られることがあり、雨期の間に伸びた、家畜の食わない草や灌木の繁茂がくい止められている。森が多いとはいっても、全体としては、プータンよりも大分減っているように思える。しかし、村々の周囲や上方には、まだまだ深い森が残っているのだ。

こうした針葉樹の森に、住民は夏の時期にキノコ取りや薪取りにはいつている。また、たとえば現代のルクラやナムチェのロッジ建設でもソルの大工たちに多くを依存しているように、ソル〜クンプのシェルパの中の有名な大工は、みんなソルの出身である。ソルの人たちは、クンプの人たちに比べ、森林との関わりが深い生活様式を持っているのだ。

主要な村々は標高2200から2900m位にあって、クンプのような、標高3600から3900mという程の、樹林限界付近から上での農耕によった集落はソルにはない。樹林限界から上には夏放牧地があるだけであり、この中間に、人があまり入らず集落や耕地もほとんどない森があるのだ。このことは、ルクラやリミジュン (Rimijung, 2813m) のあるバラク (Pharak) 地方をも含めていえ、クンプよりも南の、シェルパ族居住地の低標高地域一般にいえるのである。

プータンを何度か訪れたとき、川喜田氏にならって、プータンでも垂直的な作物帯をはっきりさせたかった。しかしプータンでは、一毛作限界は標高約4100mのタンザとはっきりしたもの、二毛作限界がはっきりしなかった。中部ネパールで

標高約3000mと報告される二毛作限界だが、プータンの標高2900mから3500m付近には集落が見られず、針葉樹の森ばかりであったのである。しかも、標高2700から2800m程度の集落の例でも、「二毛作なんてうちの村ではほとんどやらないよ」というような具合で、二毛作限界を精いっぱい上げることに対して、割に消極的な様子さえ聞くことがあったから、「作物帯の確定も、どうもうまくゆかないものだ」と思った記憶がある。しかしこのことは、ソルを見ることで記憶からよみがえり、なぜうまく行かなかったかがわかった気がした。

2) 森の上の村々

ソルよりも標高の高い地方をみれば、クンプ地方は、プータンのリンシ、ラヤ、ルナナといった地方に非常によく似ている。これらの地方は、自然地理や地質の上で、Inner Himalayas (ヒマラヤ山間高地、山間奥地) とか Inner Himalayan Valleys (ヒマラヤ山間河谷) などと呼ばれるものに当たっている。これを、以下本稿では高地山間河谷と呼ぶことにするが、共通している自然条件は、いずれの地方にも、北にはヒマラヤ主脈があってそれには標高7000m以上の高山がある一方、南にもヒマラヤ前山をなす標高5000から6000m台の山々があって、標高はいくらか低いながら、やはり氷河をかぶっていることである。つまりこれらの地方は、いずれも氷河をいだく高山に周りを囲まれた谷あいであり、住民の生活は、標高3800から4100m程度の樹林限界付近以上での、大麦・ジャガイモ・ソバなどの一毛作畑作とヤク移牧によって成り立っている。この場合、もちろん農耕は集落近傍で行われており、ヤク移牧は、夏は高山放牧地、冬は集落程度の標高の冬営地へ降りる季節移動サイクルをもっている。

巨視的にみれば、クンプなど、高地山間河谷の北のヒマラヤ主脈がその前山よりも高く、ひいてはヒマラヤ南面と北面との間のもっとも顕著な気候境界となっているにせよ、すぐ南に位置するヒマラヤ前山も氷河を抱くほどに高く、ヒマラヤ主脈ほどではないかもしれぬが、やはりひとつの気候境界となっている。このため、例にあげた諸地方の気候条件は、どれ程か、ヒマラヤ主脈以北と

ヒマラヤ前山以南のその中間的なものになっている¹⁾。

3) 森の下の村々

ブータンの「中間のゾーン」やソル地方の村々は、この前山の南面に位置する。ここから南には、もはや氷河をいただく山々はなく、樹林限界から雪線程度の高さでは、インドからのモンスーンの雲がまともにあたるのは、ヒマラヤ主脈よりもむしろここである。そのため降水量は多く、森林などの植生の密度ではクンプなどの高地山間河谷よりむしろ濃密である。高山草地も、夏放牧地として優れている。ただしそこは、夏でも日中はほとんど常に霧にまかれて非常に寒く、樹林限界付近以上の標高には、定住集落や耕地はない。濃密な針葉樹林は一種の無住地帯になっており、2900m以下位になって、ようやく畑作集落が現れるのである。このパターンが見られるのは、ソルのみならず、二毛作限界をうまく確認できなかったブータンでもいえることだった。ブータンでなら、ハ、プムタン、セフ（ニカ・チュー谷）、ガサなどの例が、ソルの村々によく似ている。

こうした標高2000m台の集落で、ヤク群が飼えないわけではない。実際ソルやブータンでは、とくに標高2300から2900m位の集落で、ヤク群を保有する世帯が少なくないものがある。一般には冬季でもおおよそ3000m以上に適すると言われるヤクだが、冬には標高2400から2800m位まで下ろされる例が知られている。ソルの場合でも、たとえばズンベシの例でいえば、冬には村の上方の丘の上（2800～3000m）に、ヤク群を下ろしてくることもあると聞いた。

ただし、こうしたヤク移牧が、高地山間河谷の集落の人々によるヤク移牧と違うところは、高山の夏放牧地と集落近くの冬放牧地の間に、深い森林を通ることである。クンプ、ラヤ、ルナナなどの、高地山間河谷の集落のヤク群は、森林の中にはいることはまずほとんどない。森の中にはいる家畜があったとしても、それは、交易輸送のため一時的に通過する去勢牝くらいのものである。つまり高地山間河谷の人々のヤク群の年間の移牧ルートはほぼ樹林限界付近よりも上に限られるのに対し、2000m台の低標高地の人の持つヤク群は、

冬には標高2400から3000m程度の、濃密な森の下までおろされるのが普通なのである。

ブータンと似ていることは、ほかにも多い。たとえば散村的景観である。上方に針葉樹林を見る谷あいのテラスや緩傾斜地、谷底が緩く広がるところに畑が続き、家屋はその中に散在している。高地山間集落ほどに、家屋は密集していない。また、ブータンで聞いた、二毛作限界をあげることに對する消極性は、ソルでもいえる。ズンベシ（2675m）付近の村々では、大部分の耕地が一毛作の麦作（おもに小麦）に利用されているだけで、二毛作を試みる場合はむしろ例外的である（ただし、一毛作でつくる作物にはトウモロコシも含まれている）。とはいえ農耕に関しては、高地山間河谷の村々よりもはるかに豊かである。観光業はさておき、住民の多くも、移牧ではなく農耕に携わる生活をしており、生業経済全般において牧畜への依存度が高地ほどに大きくないし、高地より豊かに見える。犁耕にはヤクヤゾではなく牝牛が使われており、この牛は、チベットの農耕地帯の普通牛（高地種）ではなく、それとは別の名称が与えられている低地種である。この標高では、ヤクヤゾを無理に使わなくても、もっと低地に適合した種類の、力のある牝牛があるのである。

これらのほか、似ていることには住民の雰囲気がある。たとえば、ズンベシあたりのラマ・クランの人の中には、「俺たちはシェルパじゃない。ラマだ」といって、クンプのシェルパとおなじ民族とみなされるのを嫌う人がある。クンプの人々がよりフランクでシンプルに見えるのに対し、ソルの人々はより寡黙で思慮深いように見える。これに類するような違いは、ブータンのヤクのゾーンの人々と中間のゾーンの人々の間にもあったことが思い出される。

雰囲気についてはともかく、生活や生産に関して述べてきたソル～クンプとブータンの巨視的景観のありさまは、南北断面をとって整理すると、それぞれ、図2のごとく概括しうる。図中、●は定着農耕とその行われる位置、すなわち耕地と固定家屋のある母村を意味し、○は移動牧畜とその夏における位置、すなわちヤクなどの家畜群とその夏放牧の拠点となるテントや小屋のある夏放牧地を意味する。各地方の一般的な村々や世帯な

どが農と牧を兼業しているとき、同一主体が定着農耕と移動牧畜を営んでいることを示す意味で●と○を線でつないでいる。括弧で重ねて示したその範囲は、各地方社会が一般的に生産に利用し、行政域としている範囲をも示すものである。農耕・牧畜利用地（集落・耕地と夏放牧地）の代表的な高度分布と森との位置関係をみれば、ソル〜クンプとプータンの類似は明らかであろう。

3 移住過程において好まれた場所

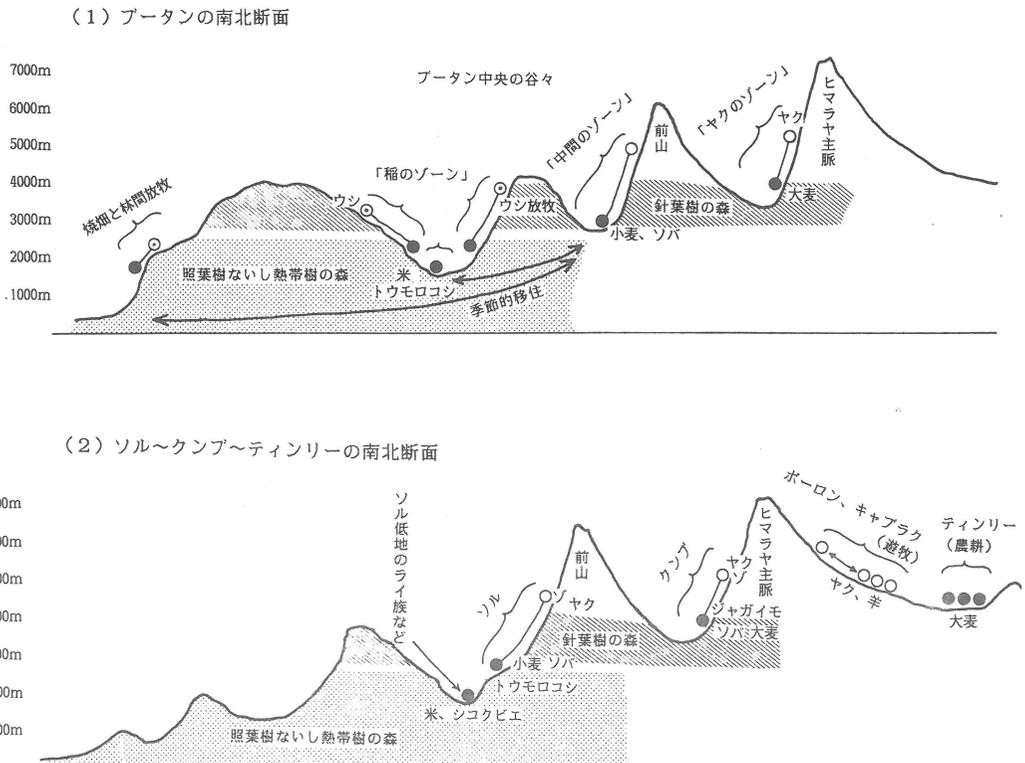
1) 南下した「チベット人」の居住域と森

周知のように、インド系の言語でボテなどと呼ばれる「チベット人」は、東部ヒマラヤでは歴史上ヒマラヤ北面から南面へと進出・定着してきた経緯があるが、上記のようなソル〜クンプとプータンの類似は、チベットから入った彼らが住み着くに当たって明らかに好まれた場所があったこ

と、すなわち彼らにとって、ヒマラヤ南面は、高度的に一律な可住性を持ったところではなく、住み着き易い場所が、不連続に、しかも特定の高度に現れるようなところだったに違いないことを示しているように思われる。とりわけ、標高2900から3500mあたりが今でも濃密な針葉樹林の無住地帯として残っていることは、何らかの環境利用の手段を持った入植者たちにとって、そこは特に利用しやすい土地ではなかった、あるいは切り開いて利用するの必要がたいしてなかったから今日まで森林として残った、と考えられるのである。

しかも、これに関連して思い起こされるのは、別稿で述べ、あるいは後述するように、プータンにおいても、ソル〜クンプ周辺のシェルパ族居住地においても、「チベット人」の入植が、より標高の高い高地山間河谷ほど早かったとは必ずしもいえない場合があって、ロールワリン、ルナナ、

図2 集落と農牧利用空間の配置



ラヤなどの入植の例は、むしろ濃密な針葉樹林以下の2000m台の場所への入植・定着の後に生じたらしいことや、標高3400から3500mに位置するナムチェが、クンプ地方の中でもっとも新しくかつ標高の低い村として、かつての森の中に開かれたことである。

つまり、東部ヒマラヤの南面に降りてきた「チベット人」たちは、標高2900から3500mあたりにある濃密な針葉樹林の上か下にまず住んだのであり、しかも時間的にみて、針葉樹林より上にある高地山間河谷への入植が先行していたとは必ずしもいいきれない。そして、その上下の地域への初期入植よりも遅れて、中間部に横たわる針葉樹林を切り開いて集落や放牧地とすることが、徐々に起こったのである。

巨大な高度差を持つヒマラヤの理解には、まずヒマラヤを傾斜帯として抽象化する概念モデルがあり、標高・温量と垂直的作物帯の関係を確認することは基本的に重要である。しかしこうした、物差しを傾けたような抽象化から逆に想像されがちな、各々の高度での比較的一様な可住性は、たとえポテンシャルとしてはあったとしても、実際にそこで生活した人々にとってはなかったように思われるのである。

2) 従来の見解の若干の補正

このような、濃密な針葉樹林帯が無住地帯になっている例は、ヒマラヤ南面のチベット文化地域のみに限られる訳でもなく、他のチベット縁辺部にも見ることができる。とくに、東部ヒマラヤ南面からいわゆる横断山脈地域をへて青海・甘粛へとつづく、弧状の地域においてである。たとえば、東部チベットのNgolo-Seta族などの居住地を踏査・探検したギボー（Guibaut）は、高原で放牧に携わる遊牧民（夏と冬で3700から4400m付近の間で放牧地を転換する）の住む場所と、深い谷底（3400m以下）で農耕中心の生活をおくる人々の住む場所の間に、地形的にも急で非常に深い針葉樹林の原生林があり、そこが「No Man's Land」であったことを報告している³⁾（両者は、経済的には無関係に生活しているのではなく、交易関係があったことも記録している）。

このように、上記の事実は、ソル〜クンプヤブ

ータン以外でも東部チベットなどに確認でき、比較的湿潤で濃密な針葉樹林がもともとあったチベット高原南東縁の「チベット人」居住地帯に、かなり共通する現象である可能性が強い。そして、そうであれば逆に、濃密な針葉樹林が未利用地に近い状態で多く残存して人口密度も比較的低いプータンなどを、チベット人が東部ヒマラヤの南面に進出した際に住み着きえた位置に関する一つの原型を保った例とみなすことも、可能となろう。とにかく、無住地帯としての濃密な針葉樹林という空間性は、プータンなどよりも自然開発が進み人口密度も高いソル〜クンプなどの観察だけからでは意外に見落とされている事実ではあるが、非常に重要に思われるのである。

以上確認してきたことは、ヒマラヤ南面におけるチベット人ないしポテという人々の居住地を、従来、標高約3000mという基準をもって画すことが常識化していたことへの再検討を促す。

環境利用の手段としては、チベットからの流入者たちは、ヤクや大麦をもって一般に想像されている。ヤク群の夏放牧には樹林限界以上の高山草地が必要であり、放牧ということに関しては、森林は適当な場所ではない。畑の開墾にあっても、深い森林は障害となったはずである。だから、彼らの入植やその後の歴史を経てもなお、針葉樹林帯が無住地帯としてどれほどか残っていたとしても不自然ではない。

しかし、現在観察する限り、部分的には二毛作をも行ってとりわけヤク牧畜に頼っているわけでもないような標高2000m台の「チベット人」は、中央・西チベットの一毛作しかできないところの人たちとは生業・生活様式がかなり異なる。畑作といっても、中央・西チベットでは灌漑が不可欠であるのに対し、ヒマラヤ南面では天水のみに頼る方が一般的でもある。そして、さらに低地に至れば、たとえ「チベット人」ないしチベット系民族であっても、もはや、ヤクをもたず、トウモロコシや雑穀の畑、さらには稲・シコクビエの水田で働く人々に出くわさざるをえない。これらの光景を、プータンでは2000m台においてすべて見ることができる。

筆者自身は、こうした生業の多様性はチベット人ないしチベット系民族に共通する環境への適応

性のゆえに生まれたと考え、ヤク牧畜すらも本来的にはその適応型の一つであったにすぎなかった（しかしそれは、歴史的にチベット高原高地部の全般に広がる結果になった）と考えるのだが、標高2400から2900m程度の場所ならヤク群の冬営地となしえたことは、「チベット人」の南下の過程において、とくに重要であったと思われる。つまり、「チベット人」たちが、入植に当たって大麦などの畑作とヤク移牧という生業・生活様式に固執し続けたとしても、東部ヒマラヤ南面の標高2400から2900m程度の場所なら、定着が可能だったということである。

標高3000mをもってヒマラヤ南面における「チベット人」の居住域を画す観点は、こうした生業・生活様式の指標から「チベット人」を規定的に捉える観点と結びついていることが一般だが、たとえその観点に留まったとしても、標高2000m台、とくに2400から2900m程度の場所なら、そうした意味でも十分「チベット人」らしい生活が可能だったという点は、もっと注目されてよいように思われる。しかも、「チベット人」南下の具体例において、針葉樹林より上の場所への入植に先行してこれらの場所への入植がなされていた場合があったのであるから、高地山間河谷よりもむしろこれらの場所の方が、住み着くに当たってはるかに有利であった可能性さえ小さくないのである。

4. チベット〜クンプ〜ソルの歴史的展開

ソルを訪れたことによって得られたのは、プータンなどとの類似からした上記の巨視的展望だけではない。「チベット人」が低地へ降りた一つの例としての、ソル〜クンプ地方社会の歴史的展開についても、もう少し細かな知見を得ることができた。次にそれを記すことにしよう。

1) ズンベシ周辺の集落と夏放牧地のクラン構成

これまでのクンプ地方の調査では、おもに牧畜というものに注目しながら経済をとらえ、クランというものから社会をとらえてきた。社会や地域の規模としては、世帯・集落・地方を考えてきた。そして、経済や社会の歴史的変化の中に、あるパターンがあることを指摘してきたのである。筆者

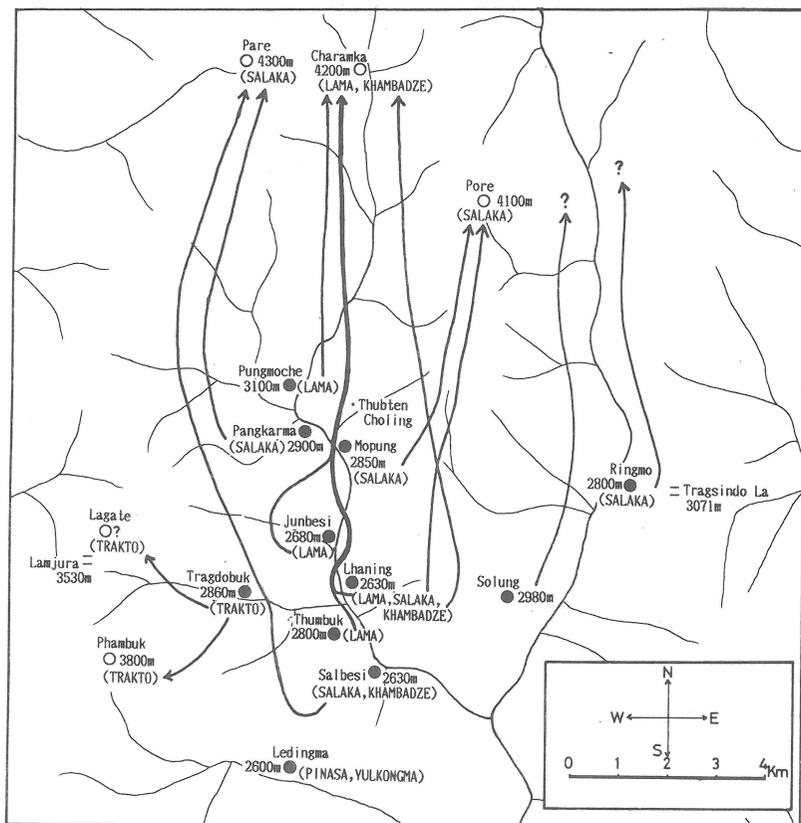
自身がソルの調査を開始するに当たっても、当然のことながら、クンプを把握したのと同様の項目に注意が向けられることになった。

ソルを訪れた時季は、ちょうど夏放牧地でヤルチャンと呼ばれる祭が行われる時季であった。各放牧地には、個々の世帯の所有になる放牧小屋（ゴテ）がいくつか集まっているが、放牧地ごとに、夏にそこに滞在している人々が集まり、母村近くの寺院からラマ僧侶を呼んで儀礼を行ったのち、一昼夜飲食をともにして歌ったり踊ったりするのである。ただし現在は、母村に家や畑があっても、移牧する家畜群を持たず、夏放牧地での放牧を行ってない世帯が少なくない。移牧を行って牧畜にも比較的能力をいれている農牧兼業の世帯は、集落ごとにみてもおおそ1割から4割くらいであり、大ざっぱに言って、ソル地方一般の住民の過半ないし大部分は、現在この祭には参加しない。クンプ地方と同じように、相対的には牧畜は衰退してきたのである。それでも、家畜群を持つ世帯の人々は、常時放牧地に滞在している人でなくとも、祭の数日前に集落から放牧地に上がってき、祭に参加してからまた集落へと下りて行った。

夏放牧地で放されている家畜は、牝ヤク（ナク）または牝ゾ（ゾム）の群れであり、一部、オカルドゥンガ近くから放牧に上がってきたグルン族の山羊・羊がある。彼らは、ナクやゾムは持っておらず、古くからソルのシェルパたちに放牧料（カルチャリ）を払って夏放牧地を利用する慣習がなりたっている。

さて、図3は、今回（1992年）のフィールドノートのあるページの写しである。ここには、ズンベシ周辺の集落の例と、ヤルチャン祭の行われる放牧地の例をメモしている。各々の集落の世帯数は、比較的多いものでも、ズンベシ：35から40戸、モプン：60から70戸という程度であり、少ないものでは、たとえばズンベシの少し下のハニン（Lhanin）では、10戸に満たない。同様に、それぞれヤルチャン祭が行われる夏放牧地の規模にも違いがあるが、少ないものは数戸のみにて祭を行う。比較的規模の大きなものでは、歩いて30分から1時間ほどの範囲にある放牧小屋の住民が集まって、30戸以上の規模になるものもある。

図3 ズンベシ周辺の集落と夏放牧地のクラン構成



図中●や○が示す意味は図2の場合と同じであるが、ヤルチャンの行われる放牧地や各集落に添えて、そこを構成している諸世帯が、どのようなクランからなっているかを記してある。なおここでは煩雑をさけるため、ヤルチャン祭に参加しているものでもグルン族は除いてある。

これを聞き取って、筆者がまず驚いたのは、各集落を構成するクランの数の少なさである。これまで本誌で述べてきているように、クンプ地方の各集落には、オールド・クラン、ニュー・クラン、カムバなど、実に多数のクランが同一集落の中であって、その異なるクランの数は10以上であることも珍しくなかったのだが、ズンベシ周辺の集落では、1つから3つほどのクランしかない。この情報は簡単な聞き取りにすぎず、ヤルチャン祭の

例にはもれがあることがわかっているし、各集落や放牧地におけるクラン構成にも、もしかするともれがあるかもしれない。しかし、集落ごとにみれば、1村1クラン、ないし1村数クランというあり方が、ズンベシ周辺では珍しくないようである。

しかも、ここに現れているクランはいずれも、オピッツ (Oppitz) の整理によるオールド・クラン (4つのプロト・クランが分かれて生まれたそれらのサブ・クラン) であり、クンプ地方にみられた、Nawa、Lhukpa、Mendewa、Chuserwaなどのニュー・クランが入っていない。また、さらに新しい時代にクンプに到来していたいわゆるカムバ (Khamba) が入っていない。

ズンベシの近くには、チベットから逃れてきた

ニンマ派の高僧の元に同派の僧侶、尼たちが数百人も集まっているトゥブテン・チョリン寺があるが、彼らは、村社会の中にはどうやら参入してはいない。歴史的にも、クンプにおけるカムバのような人々は、ズンベシ周辺の集落には、ほぼまったくいないようである。

さて、図3においてヤルチャン祭の行われる放牧地をみると、さらに興味深い。この場合は、祭の行われる1放牧地あたり1クランというあり方が、定住集落の場合よりもより厳密にいえるのである。各放牧地には、定住家屋と耕地のある母村の違いを越えて、同じクランのものが集結し、ヤルチャン祭を行っているのである。

2) 若干の考察

以上のようなことがら、つまり、チベットからのニュー・クランやカムバの流入は、特にクンプにたいして及んだということ、ソルでは集落や放牧地にクラン占有地が存在し、クラン単位で祭を行うこと、またかつてはクンプにもそれらは存在していたが、次第にみられなくなったことは、いままですでに、オピッツ (Oppitz 1968; 1974) やハイメンドルフ (von Fürer-Haimendorf 1964)、あるいはコックス (Cox 1985) などによって記されてきたから、ある程度は筆者自身も予想はしていた。しかし、これほど鮮明に、クンプと違うというのは意外であった。

ここでもう一度確認すると、ズンベシ周辺では、1: ほとんどオールド・クランが支配的で、ニュー・クランやカムバという、比較的新しい時代にクンプに流入した人々がいない。

2: 1村1クランないし1放牧地1クランという原則がうかがえ、しかもそれがより厳密にいえるのは、母村よりも放牧地においてである。

3: 放牧地でのヤルチャン祭は、各クランごとの祭である。

ということがいえるのである。

これらは、クンプ、特にナムチェやその近くの集落が現在持っている性格と、正反対とさえいえる。ナムチェなどでは、

1: 少なくとも数の上では、オールド・クランよりむしろニュー・クランやカムバが支配的で、初期入植以降近年まで何派にもわたるチベットから

の人口流入があった。

2: 各母村や放牧地は、たいへん多数のクランの人々からなっており、むしろ、1村多クランが「原則」であるような現状にある。

3: クランごとの祭などはほとんど行われておらず、ヤルチャン祭でも、村ごとに行うドゥムジ (Dumje) でも、多数のクランが参加している。

このように見てくると、シェルパ族居住地におけるクンプ地方というものの特殊性を浮かび上がらせるための端緒が、開けてくるように思われる。

周知のように、初期入植のころに入ってきたLamaやTraktok、Salakaなどのオールド・クランは、ソル〜クンプのみならず、それよりはるかに西や東の、広い範囲に現在広がっている。それこそが、いわゆるシェルパ族居住地を形成しているのである。ソルにおける1村1クラン、1放牧地1クラン、クランごとの祭は、人口増加などによってカプロト・クランが数多くの派生クランに分かれることになった当初から、かなり広域において、彼らがもともともっていた原則と考えられる。

ここでは省略するが、ズンベシ周辺においても、本誌でこれまで述べてきたクンプにおけるヤク牧畜の衰退のごとき経済変化はある程度指摘でき、この地方でも、ヤク移牧はより古い時代の方が相対的に盛んであったものが、徐々に定着農耕などへと生業の力点が変わることによって、衰退してきたと考えられる。もしそうであれば、現在そこにおいて母村よりも放牧地においてのほうが1クランのみという原則が保たれていることは、もともと散村的であった耕地と家屋の配置がより稠密化する中で、1クランという原則が集落では緩やかに崩れつつあったことを示すと解釈することは可能であろう。つまり、ニュー・クランやカムバの流入をみたクンプでは、この崩壊がソルよりも早く進行したとみなしうる。ただし、クンプにおけるニュー・クランの人々は、現在観察しうるだけでも一般に耕地や放牧地をひろく持っていることでオールド・クランの人々とさほど違いはないことから判断すれば、ニュー・クランの人々が到来したときには、まだクンプにも未利用地があったのに違いない。しかし、カムバについてはそれはいえないだろう。

財産をほとんど持たないカムバが少なからず流

入してナムチェの村が生まれたとき、すでにクンプは、ソルとはかなり異質の社会となっていたかと思われるが、前号までで議論してきたように、交易の村としてのナムチェは、その後クンプ地方の経済センターとしての役割を果たすことになり、広域経済と関わってのみ生きてゆける集落となった。ナムチェは、先ほどあげたズンベシ周辺で今でも観察可能なとはまったく正反対の、「原則」を最先頭で作り上げてきた集落といってもよい。

ここで、祭に関して一つつけ加えておけば、クンプ地方の住民にとってもっとも重要な祭はいうまでもなくドゥムジであるが、現在クンプ各村のドゥムジで主催者たち（ラワ）によって費やされる金は、ソルのそれとは比べものにならないほどである。しかも、クンプの中でも、ドゥムジの運営方法には微妙な違いがあり、バンボチェヤクムジュン・クンアでは、主催者個人が非常に多額の金を工面せねばならないのに対し、ナムチェでは、60年ほど前から、友人や親類が金品を提供することで主催者の一時的な出費を助けるという互酬的システム（「メンバル(Member)関係」）が発明されている。

ズンベシ周辺での諸原則から現在のクンプないしナムチェへという性格の変化は、言い替えるならば、オールド・クランの原則から、ニュー・クラン、そしてカムバの原則へという変化であるように、筆者には見える。より古い時代のシェルバ社会ないし「チベット人」像は、より周辺かつ低標高の地域にこそ見られるのであり、たとえば、ハイメンドルフがオープン・ソサイエティーとして示した諸クランの同心円図式などは、まさにほとんどクンプでのみ成立しうる、いわば特殊な図式であったのではないか。

クンプにおけるオールド・クランからカムバへという変化は、クランという血縁原理を統合原理とする思想への挑戦の歴史という側面を持っていた。カムバの人たちを含め、ナムチェの人たちが、互いを助けつつクランの祭ではない村の祭としてのドゥムジにあればど力をそそぎ込み、クラン神ではないクンプ地方の神としてのクンピラ（Khumbu-i-yullha）を拝み、一角千金をねらって登山へと挑んで、まるで外国人をして「代表的シ

ェルバ」と思わせるがごとく振る舞ってきた背景に、「特殊なシェルバ社会としてのクンプ、そしてその突出点としてのナムチェ」という観点は、欠かせないように思われる。

注

1) とくに、中部ネパール以西の高地山間河谷には、その谷あいの南に位置する山塊の方が、北に位置する山塊よりも標高が高い例が多い。例えば、ガネッシュ、マナスル、アンナプルナ、ダウラギリなどの山群の北に位置するシアル・コーラ（Shiar Khola）、プリ・ガンダキ（Buri Gandaki）上流、マルシャンデー（Marsyandi）川上流、ナル・プー（Nar-Phu）谷、カリ・ガンダキ（Kali Gandaki）上流（タコーラ地方以北）などにある集落や地方の例として、ツムジェ（Tsumje：3100m）、サマ（Sama：3400m）、マナン（Manang：3500m）、ナルヤ（Nar,Phu, 3900m-4200m）、トルボ地方（Dorbo：集落は3400~4250m）、ムスタン（Mustang：4000m）などがあげられるが、これらはみな、北の山塊の方が低い高山山間河谷といつてよい。つまり、ヒマラヤ主脈の北に位置するため、乾燥の度合いが強く、気候の上ではよりチベット（中央・西チベット）に近い。

後述の、ソル〜クンプやプータンにおける無住地帯の標高（おおよそ2900mから3500m）は、これらの高地山間河谷には当てはまらないが、それは、乾燥度が強いために、斜面をおお濃密な針葉樹林などは自然林としても存在しないことによる。本稿は、東部ヒマラヤの、しかもヒマラヤ主脈よりも南面の、全体としてはかなり湿潤な地域の「チベット人」居住地帯を問題にしているのである。なお本稿でいう「チベット人」とは、チベット仏教やそれに深く関わった政治体制など、吐蕃王国以来のチベット文化と深く関わった伝統的文化を持っていた人々、ないし、チベット語の方言をしゃべる人々である。

2) ソル〜クンプ地方への「チベット人」の最初の入植は、たとえばオピッツによれば16世紀のことであった（Oppitz 1974:233）。またその後、特にクンプに向けては、何派にもわたってチベットからの人口移入があった。

プータンやシッキムの場合、チベットにおけるダライ・ラマ政権の成立に前後して、チベットから流入した人々によって国家形成がなされた（17世紀）。ただし、プータンにおけるチベット人の流入・定着は、8世紀頃から起こっていたともいわれ、また11世紀頃以降、チベットに現れる仏教諸派も入ったことが知られる。プータンにも何派にもわたってチベット人が入ったと思われるが、その移入の歴史は、ソル〜クンプに比べれば、はるかに古い。

なお、今日のシェルバ族居住地のうちでも、ロールワリン地方への入植はソルやクンプよりも遅れ、今から百数十年前のことにすぎない（鹿野 1979；Sacherer 1981）ように、ここ何世紀かのうちによりやく人が住みはじめた地方は、ソル〜クンプのほかにも、プータンなど、東部ヒマラヤの高地山間河谷には少なくない。

こうした「チベット人」のヒマラヤ南面への適応過程における生態学的側面については、邦文では鹿野(1980; 1981)が若干検討を試みている程度であり、まだまだ不明なことがらが多い。

- 3) ギボーの報告した例では、3400m以下にて、谷あいの農耕集落があるとされているから、標高の上では東部ヒマラヤ南面と若干差があり、森の下の農耕集落はいくぶん高くまであるようである。しかし、これと似たようなパターンは、おなじ横断山脈地域である西北雲南において、筆者自身も観察した。

横断山脈地域では分水嶺に近い高所ほど湿潤で谷あいの大河に近づくほど乾燥するという現象が現れる。西北雲南の道路沿いでは、メコン川(瀾滄江)に面したところでは乾燥が激しく、集落・耕地は水のえられる場所に限られ、標高3000m近くになってようやく松の疎林に達するが、それから分水嶺に近づくにつれ、濃密な森となる。水流が得られるために、徳欽への支流には集落と耕地が谷沿いに続いているが、徳欽(3300m)くらいの標高から森が濃くなり、やはり濃密な針葉樹林帯となった。標高3500から4200m付近には農耕集落はなく、樹林限界をぬけたペマ・ラ(4300m)付近に、ヤクヤゾ、牛の夏放牧地があった。

注1)において述べたように、雨陰効果によって乾燥し、もともと濃密な針葉樹林が発達していなかったと考えられるようなところは、一般的に開発は容易であったと思われるが、このとき特に重要なのは、比較的日当たりが良くていくらか乾燥しており、しかも耕し易い緩傾斜地をもつ谷あいである。

このように、濃密な針葉樹林というものも場所によって現れる標高が若干異なると思われるとはいえ、東部ヒマラヤとさほど緯度も違わない東部チベットのことであるから、十分な降水のある場所であれば、東部ヒマラヤと同じような標高に、濃密な針葉樹林帯が現れる。その例は、夏冬ともに気流が滞留する四川盆地を取り囲む山地にみられる。

たとえばクンガ山(ミア・コンガ)東麓の水河森林公園では、標高2800から3800mには、濃密な常緑針葉樹林が発達しており、樹林限界は、4200m近くに達する。それより下の、標高2500から2800mには、針葉樹のほかにも落葉広葉樹が混じり、標高2200から2500mでは、常緑広葉樹と落葉広葉樹が混じっている。大渡河沿岸の1800m位までは、比較的乾燥した谷あいで稲作ないし畑作村(特に漢族)が多い一方、それ以上の2600m位までの標高には、尾根上での畑作を主として比較的多くの家畜を飼う族の集落が散在する。このあたりの、比較的湿潤で濃密な自然林も残存していた東チベット東縁部では、歴史的に、乾燥度の高い大河川の沿岸から入植と原植生の破壊が進んできており、標高2500m以下の照葉樹林帯の破壊が、現在もつとも盛んである。これに比べれば、針葉樹林帯の破壊は開墾のためよりも木材の獲得のために生じている。

さて、以上のような地形性の気候の問題があるた

め、東部ヒマラヤにおいても、本文で指摘した標高2900から3500mの間に、定住集落が立地している例はもちろんないわけではない。たとえば、筆者自身は訪れたことはないが、東部ネパールのワロンチュン(Walongchung)は、標高3050m程度に位置している。しかしこれも、標高5000m以上の尾根を南におき、東にカンチュンジュンガから南に迫り出す6000m以上の尾根をひかえている谷あいにある高地山間河谷といえるので、ここでの論旨からは矛盾しない。

なお、シッキム北部におけるボーティア村として有名なラチュン(Lachung)やラチュン(Lachen)、下チュンビ谷(トモ地方)のヤトウン(Yatung: 巫東)などは、いずれも標高2700から2900m付近にあり、しかも、プータンのハの人々(Hap)が拡大・移住したところと言われている(Macaulay 1977(1885):28; Bhasin 1989:85-88)が、これらも、ソルやプータンのハ(Ha)と同じく、森の下の「チベット人」集落として考えて良いだろうと思う。

文献リスト

- Bhasin, Veena (1989) *Ecology, Culture and Change: Tribals of Sikkim Himalayas*, Inter-India Publications, New Delhi.
- Cox, Thomas (1985) *Herdling and Socio-Economic Change among Khumbu Sherpas*, *Kailash* 12(1-2): 63-79.
- von Fürer-Haimendorf, Christoph (1964) *The Sherpas of Nepal: Buddhist Highlanders*, Oxford Book Co., Calcutta.
- Guibaut, André (1987) *Tibetan Venture*, Oxford University Press, Hong Kong. (First published by John Murray Ltd., London, 1947)
- Guibaut, André (1944) *Exploitation in the Upper Tung Basin, Chinese-Tibetan Borderland*, *The Geographical Review*, 34(3): 387-404.
- 鹿野勝彦 (1979) 「ロールワリン・シェルバの経済と社会」『リトルワールド研究報告』3:i-xviii, 1-43.
- 鹿野勝彦 (1980) 「シッキム中部のボーティア農村-生業形態とその形成過程をめぐって-」『リトルワールド年報』2(1979年度):1-15.
- 鹿野勝彦 (1981) 「自然と歴史が織りなすヒマラヤ 三つのチベット系民族の適応」『季刊民族学』17: 50-64.
- Kunwar, Ramesh Raj (1989) *Fire of Himal: An Anthropological Study of the Sherpas of Nepal Himalayan Region*, Nirala Publications, Jaipur.
- Macaulay, Colman (1977) *Report of a Mission to Sikkim and the Tibetan Frontier*, Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu. (First published in 1885 by Bengal Secretariat Press, Calcutta.)
- Oppitz, Michael (1968) *Geschichte und Sozialordnung der Sherpa*, Springer/Innsbruck-München, Universitätsverlag Wagner.
- Oppitz, Michael (1974) *Myth and Facts: Reconsidering some Data concerning the Clan History of the Sherpa*, Christoph von Fürer-Haimendorf (ed.), *Contributions to the Anthropology of Nepal*, Aris & Phillips Ltd., Warminster, England, pp.232-243.
- Sacherer, Janice M. (1981) *The Recent Social and Economic Impact of Tourism on a Remote Sherpa Community*, Christoph von Fürer-Haimendorf (ed.), *Asian Highland Societies*, Sterling Publishers, New Delhi, pp.157-167.